

だんけつ

銀座

No. 100

だんけつ編集委員会 (JP労組東京銀座支部・組合員有志)

danketuginza2009@yahoo.co.jp



改憲・戦争反対の団結を

職場からつくりだそう！

2018年の冒頭に当たって「あいさつ申し上げます。『だんけつ』も今号で100号となりました。名前のとおり職場のみなさんと団結できる紙面づくりを目指してまいりますのでよろしく願います。」

さて、1月開催の通常国会は、冒頭から労働法制改憲8法案、卸売市場法廃止法案上程が始まろうとしています。安倍政権は、戦争参戦の準備として、改憲の発議から、19年の

国民投票―参院選をとおして2020年オリンピックピックへと舵を切っています。さらには、4・30天皇退位・5・1即位が言われています。かつて大正から昭和へと変わる中で、戦争に突入していったことを想起させるような状況が目の前にあります。

そうした中で、敵は盤石ではありません。敵の弱点は労働者を戦争に動員できていないことです。

2020年オリンピックピックを頂点に、あらゆる手段を使って挙国一致を図ろうとも労働者はだまされません。国鉄分割・民営化以来の新自由主義攻撃は、労組破壊をとおして、とりわけ青年を非正規職化と貧困にたたき込んできました。安倍の働き方改革の名のもとに、今春450万人の非正規労働者が解雇や最低賃金レベルの「名ばかり正社員」攻撃にさらされています。こうした現実や、7年目を迎える3・11福島原発事故の現実、安倍の言う「収束」とは真逆で、避難者への帰還の強制と被曝の強制を強いています。

そうした現実を日々の暮らしの現実の中から見ていこう。どれが真実で、どれがウソなのか。みんなの力で見極めて、改憲・戦争反対の団結を職場からつくりだそう！

【つら面に続きます】

証言

戦争での体験談(2)

私は、長野県東信地方の養蚕農家の8人兄弟の長男として生まれた。戦争中は都会と違ってそれほど困った生活はしていなかった。長野県では松本に軍の基地があったため、何度か戦闘機が上空を飛行し、数度の空爆があった。自分の家は山を越えた離れた場所だったので、被害はほとんどなかった。

暫くすると戦局が変わり、国民総動員の戦いと化した。召集令状(赤紙)は来なかったものの、各家から一名予備兵として入隊させる施策が始まった。基本的に長男は家長として免除されていたが、次男が病弱のため自分が代わりに予備兵に入隊することになった。

最初に松本で訓練を受けた。自分の配属部署は後方支援補給部隊で、戦闘の最前線に物資を送る役割だった。一週間ほど訓練を受けたあと、名古屋に移動した。南太平洋上の島に向けて船で出陣するためだ。

船で4日揺られたあと、名前の知らない島に着いた。港に着いた部隊は一緒に積んできた補給物資を持ち、島内

陸で作戦中の前線部隊へ徒歩で輸送することになった。一部地域で既に連合軍と交戦している場所もあり、戦闘訓練を受けない者ばかりで構成された部隊は、いつ死ぬか分からない状況での作戦行動だった。軍の方からは、自分の身は自分で守れと小銃を支給されたが、敵や現地人の違いなど分かるはずもなく、人に向けて銃を構えるなど考えてもいない。

今まで経験のしたことのない熱帯気候で、まず全員体調を崩した。原因不明の高熱や、下痢・嘔吐で苦しんだ。当然それらに効く薬などはなく、この作戦を開始してから一週間後、とうとう犠牲者が出てしまった。病気による死亡だった。数人で密林の地中に穴を掘り遺体を埋めて犠牲者を弔った。伝染病の恐れもあったことから、部隊から出された者(見捨てた)も多く、それ以降詳しい情報は入ってこなかった。

日本の敗戦が濃厚になり始めたころ、南方戦線も前線の死傷者が増大し、自分達の部隊にも爆撃があった。港湾の物資倉庫には多くの負傷者が担ぎこまれた。銃で撃たれた者、爆弾で手足が損傷した者など、しかし医療設備な

どは無いため、そのまま放置されることが多かった。いつか手足が吹き飛ばされ瀕死の状態に運ばれた者がいた。もう助かる見込みがなく苦しむ一方だった。私はその人にある依頼をされた。自分を楽にしてくれ、と。

私は銃口をその人の心臓に向け引き金を引いた。腕に痺れる衝撃と、一瞬の呻き声があったがすぐに終わった。負傷者は苦しみに耐えられず、自分でも死ぬ、代わりに私が楽にしてあげた。初めて人を殺した、この時の感覚は今でも憶えている。終戦までに何人もを楽にしてあげた。

終戦を迎え、私は日本に引き揚げることになった。約一年ぶりに十数人の形見をもつて日本に帰った。数人を除き何とか渡すことはできたが、遺品のペンや時計など受け取った時の遺族の泣き崩れる顔が思い出される。引取りのない遺品は近くの寺に供養のため預けた。なぜ日本は戦争をやり、このような体験をしなければならなかったのか。私は人を殺した。戦争で生きて帰ってきた者として、一生命の重みを考えて生きることになるだろう。

(銀座高組合同員の親戚からの証言)